

講演「葬儀社が取り組むべき終活とは」

一般社団法人終活カウンセラー協会代表理事 武藤頼胡氏

人生の棚卸しで、生き甲斐を探求



▲武藤頼胡氏。東京都在住。終活カウンセラーとして、「終活」という考え方を日本中に広めている。葬祭コンサルタント業のリンテアライン株式会社代表取締役社長

終活カウンセラーのきっかけ

「終活」について話させて頂きます。聞きなれない言葉とありますが、私が「終活カウンセラー」という資格制度を作った張本人でございます。

私は一般の方向けに日本全国で月10本くらいの終活の話をさせて頂いています。そこで自己紹介をしますと、「何で終活カウンセラーというものをやり始めたのですか？」という質問を第一にされます。

そこで簡単に紹介させて頂きますと、会社員だった私は2009年に独立しまして、損害保険会社のコールセンターを設計する仕事を始めました。この仕事を進める過程で日本葬祭アカデミー教務研究室の二村祐輔代表に出会い、1年半ほど修業さ

きっかけでした。

二村先生のお供をしなが、さまざまな葬式セミナーに出席しましたが、そこに参加されている60〜80代の方々の質問を聞いていて気付いたことがあります。葬式だけに限る質問もありますが、それ以外の家族であったり、相続のことであったり、終焉に関する質問が山ほどあるわけです。そういう相談や悩みというのは、何が分かっていて何が分かっていないかが分からない。それで私は終焉のことを考えれば考えるほど分からないという方の話を一括してお聞きして、その方に専門家が必要であれば、各専門家に解決方法を委ねる、そういうシステムがあればいい、でもいい世の中になるのではないかと、ということを考えて終活カウンセラーというものを作りました。

この仕事では一般の方からの相談が結構入りますが、専門家が必要でなければならぬ案件は15%くらいです。あとの85%は本当に話を聞いてほしいだけなんです。

終活カウンセラー協会は、高齢者に安心で安全な世の中を、終活カウンセラーを通じて住みやすい、よ

動しています。2010年に立ち上げ、2011年に法人化しました。2010年に終活相談センターというウェブを立ち上げた時に、ネットで「終活」を検索するとヒットしたのが1件だけで、それが終活相談センターでした。それが現在は1440万件。「終わる」「活」でもヒットするので、「終活」だけの数字でないのですが、それにしてもたった3年でこれだけ増えた言葉なのです。特にこの1年間で流行った言葉だということを感じておいて下さい。

なぜ終活が必要なのか

私はウェブサイトを立ち上げた時に、「終活」を「人生の終焉を考えることを通じて自分を見つめ、今をより良く自分らしく生きる活動」と定義しました。これは「こうしなさい」というやり方を示しているものではないのです。終活の根底を考えると、やり方ではなくあり方を伝えていくものです。終活という考え方があり方であり良く生きるとはどういうことかを振り返り、人生の棚卸しをして頂きたいのです。

終活カウンセラー協会には本当に多岐にわたって相談が入ります。一

のプロフィールを見て、相談出来るかそうでないかを見極めた上で相談に来られます。ですから、私たちとしてはそこで何をすべきかを考えてみなければなりません。

まず、終活カウンセラーとして取り組むべきは、「私が終活に取り組んでいる人間です」と旗揚げすることが大事です。次に相談の場では「何でも話していいですよ」という状況をつくるのが大事です。本当の相談は帰り際になって「実は……」という形で出たりするわけです。それから、私たちだからこそ出来る終活を探求することが大切です。他で真似出来ない終活をやらなければいけないわけです。

あるお寺さんから、「終活に取り組む価値は何ですか」という相談を受けました。何か対価を求めるような話なので、私は少し違うなと思います。そこで私たちが提案したのが、そのお寺でしか出来ない「甲斐の探求」ということでした。今、私たちは檀家さんなど一般の方に向けて「私の生き甲斐ってこういうことなのだ。ちょっと考えてみよう」と思って帰ってもらえるセミナーづくりをしています。お陰さまで、今まで来られなかった檀家さんがいっぱいお寺に来

られるようになりました。

また、ある保険代理店の取り組みでは、「快活ライフ」ということで、終活相談の会社を立ち上げ、コーヒールームを作ってサロン形式で相談に乗る店をオープンさせました。終活の相談が月10件くらいあり、葬儀の相談も入るようです。

超高齢社会に必要な仕事

では、なぜ「終活」が必要なのか。その社会的背景について考えてみます。

65歳以上の高齢者が7%を超える「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」、そして21%を超えると「超高齢社会」です。日本は昨年23・3%（厚生労働省）なので「超高齢社会」です。今年は25・1%、22年後は33・4%になると予測されています。

ここで問題をはき違えてはいけま

せん。高齢社会や超高齢社会自体が問題なのではなくて、そうした社会で発生する雇用や年金制度が問題点だということです。高齢社会・超高齢社会になるということは、とても成熟したい社会になるということです。問題点が違うのです。

日本の5000万世帯のうち、3分の1の1500万世帯は一人暮らしです。65歳以上は500万世帯くらいあります。つまり、自分の死のことは自分で考えなければいけない時代になってきたと言えるのではないのでしょうか。ですから、皆さんが終活をこれだけ真剣に考えるようになったわけですね。死は縁起でもないという時代から、家族に迷惑をかける時代ではないという考えの時代に変わってきたわけです。

当協会は8月末に「終活フェスタ2013」を東京で開催しました。このイベントはエンディングノートにテーマにしたのですが、皆さんはこのテーマにすごく興味を持っておられました。65歳以上の3500人の方に行ったアンケート結果がありますが、全体の48・7%の方が「エンディングノートを書きたい」と言っておられます。しかし、「実際に書いた人」「書き始めた人」は4%

くらいしかいません。

なぜ書けないかと言えば、書くのが難しいとか、何を書いていいかわからないからです。なぜ分らないのか。実はエンディングノートは未来ノートなのです。未来の家族のために書いておくノートなのです。ということは、今までの人生の棚卸しをし、今までどのように生きてきたかということとをちょっと考えないと、未来のことは書けないわけです。

最後に一つ。「なぜ終活をするのか」ということです。「なぜ葬儀の準備をしたいと思うのか」「なぜお墓の手当てをしたいと思うのか」。それは家族に対する愛情ではないかと思えます。「家族に迷惑をかけたくない」ということでよく相談に来られますが、「なぜ迷惑をかけたくないのですか」と聞くと、答えられないのです。他人であれば、そうは思わないわけです。自分の家族だから迷惑をかけたくないのです。家族を愛しているからこそ葬儀の準備をしたいわけです。相談に来る方の方のそういう気持ち、相談内容の奥深い意図・意味、「なぜ」というところをぜひ汲み取って、皆さんに相談業務をして頂きたいと思えます。

(文責編集部)



▲講演会会場